

卑劣な耳

下

佐野 洋



卑劣な耳

佐野 洋

江苏工业学院图书馆

藏书章



卑劣な耳〔下〕

一九九一年六月三十日

初版

著者

佐野洋

企画・協力

佐野洋企画

発行者

山本 功

印刷

光陽印刷

製本

小泉製本

発行所

株式会社 新日本出版社

〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷四の二五の六

電話

(〇三) 三四二二一八四〇二 (営業)

(〇三) 三四二二一九三三三 (編集)

振替番号 東京三一一三六八一

落丁・乱丁がありましたらおとりかえいたします。

本書の内容の一部または全体を無断で複写複製(コピー)して配布することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版社の権利の侵害になります。小社あて事前に承諾をお求めください。

卑劣な耳「下」 目次

記事の裏側	5
偽りの肩書	51
留守番電話の意味	82
新たな疑問	125
録音された声	168
苦しい演技	195

卑劣な耳「上」

知らない投書

盗まれた声

暴かれた名前

上司の指示

政治的結着

肩代りの組織

カバー・扉装画
森 秀雄

卑劣な耳

〔下〕

「赤旗」日曜版（一九八九年九月二十四日～一九九〇年十二月二十三日）連載

記事の裏側

1

自宅に帰った冴子は、浴槽の掃除を始めた。夜になっても蒸し暑さが変わらないので、水を使えば、少しは涼しい気分になるだろうと考えたのだ。そこに電話がかかって来た。

冴子は、濡れた手を拭きながら、送受器をとった。恐らく、由紀だろう……。夕方、留守番電話に連絡をくれたというメッセージを入れてある……。

やはり、予想の通りだった。

「はい、柳瀬です」

という彼女の言葉を追いかけるように、由紀が

「どうだった？ 奥村君に会ったんでしょ？」

と、問いかけて来た……。

「どうって？」

「だから彼の印象。冴子のタイプじゃない？」

「何言っているの」

冴子は、強い口調で言った。「あたし、奥村さんにいろいろ聞かれて困ったのよ。彼は、由紀に言われてあたしに会いに来たと言っていたけれど、あたしは何も聞いていないんだもの。彼、由紀との仲がぎごちなくなっているとか言っていて悩んでいたわよ」

「ふうん……。それで、冴子はどう思った？」

「どうもこうも……。あなた、いまどこにいるの？」

「軽井沢……」

由紀は、得意げな口調で答えた。

「軽井沢？ お友だちの別荘か何か？」

「ううん、ホテル。あたし、実際のところ、彼が鼻についたのよ」

「そんな……。彼の方は、由紀が好きでしょうがないみたいよ。とにかく、電話ぐらいして上げなさいよ」

「どうして？」

由紀は不思議そうに言った。「彼との付き合いはもうやめるつもりなんだもの。なまじ電話なんかかけない方がいいと思うの」

「奥村さんのどこが厭なの？」

「要するにどじなのよ。司法試験は二年続けて落ちるし、デートのときも、難しい議論を吹きか

けてきたり……。まだ学生のままで、ちっとも大人になっていない感じ……」

「だって、そんなことは……」

「それに従兄妹同士の場合、こどもを産まない方がいいというし……。あれこれ考えて、やめにしようと思ったの」

由紀は、強い口調で言い切った。

「でも……」

と、冴子は言った。「彼の方は、由紀のそういう気持を知らないのでしょうか？」

「うん、だって彼、いろいろ屈折しているの。鼻についたなんて言えば、何されるかわからないでしょう？ だから、冴子を紹介して、徐々に風向きを変えようと思ったの」

「風向きを？」

と、冴子は聞いた。由紀の話し方は飛躍が多くてついて行けない……。

「そう、彼、要するに寂しがりで、ガールフレンドが欲しいのよ。新しいガールフレンドができれば、あたしにつきまとうのも止めると思うし……。それから、冴子も恋人がいらないと言っていたから、紹介すれば、うまく行くのじゃないかと……」

「そんな……」

冴子は呆れて、言葉が続かなかった。

「ねえ、どう？ 彼って冴子のタイプだと思っただけけど……」

「変なこと言わないでよ」

冴子の頭で閃いたことがあった。「それより、あなた、軽井沢には一人で？」

「まさか……」

と、由紀は派手な笑い声を立てた。「軽井沢に一人で来る人なんていないわよ。いま彼、バスを使っているの……。それはそうと、とにかく、奥村とは、もう付き合う気はないの。だから、そのこと、冴子の口から伝えてくれないかな」

「いやよ、そんな……。第一……」

「ねえ、もうそろそろ彼がバスから出るころなの。とにかく奥村のこと頼むわね。彼の電話は……」

由紀は、早口で番号を言い、電話を切ってしまった。

2

冴子は、頭の中で七桁の数字を繰り返していた。それは奥村不二男の電話番号だった。岡野由紀が一方的に言った数字であったが、不思議に冴子の耳に残っていた。

「由紀ったら」

冴子は、そうつぶやきながら、その数字を自分用の電話番号リストに書き取った。由紀に言われた伝言を、奥村に伝える気持はなかったが、一応リストには記入しておこうと思ったのである。

だが、その途中で不安になった。その数字は電話を聞きながらちゃんと確かめて、書き取ったものではない。だから、ことによると、記憶違いをしているかもしれない……。

冴子は、そこで試してみることにし、電話機のプッシュボタンを、その数字の順に押してみた。

押し終わると、予想していたより早く相手が出た。しかし、相手は、

「はい」

と、ぶっきらぼうに言っただけで、名乗ってくれない。

「もしもし……」

と、冴子は言った。「奥村さんですか？」

「ああ、柳瀬さんですね。彼女のことがあったのですか？」

奥村は、冴子の声を覚えているらしい。冴子が名乗る前に、そう呼びかけて来た。

「ええ、あのう……」

冴子は迷いながらも言った。「ちよっと前に電話がありました」

「そうですか……。しかし、ぼくの方には何も言って来ないんですよ」

「ええ……。彼女、今、東京にいないようです」

「じゃあ、どこに？」

「あのう……。あたし、実は奥村さんへの伝言を頼まれたんです。彼女、奥村さんのお付き合いをやめたいんですって……」

冴子は、一息に言った。奥村のためにも、由紀の伝言をそのまま伝えた方がいいのではないか、という気になったのだ。

「え？　どういうことですか？　もう一回言って下さい」

思いなしか、奥村の声は震えているようだった。

「ええ、ですから、今までのようなお付き合いをやめて……。もちろん親類だから、そういうお付き合いはするけれど……。そんな意味の伝言でした」

「要するに、ぼくが振られたというわけですね？」

「さあ、そのところは……」

冴子は、あいまいな返事をした。

「で、彼女はいまだここにいますか？」

奥村は早口になった。

「それは……」

冴子は、ちよつと迷ったが、教えることにした。そのことを由紀に口止めされたわけではないから、差し支えないだろう。「軽井沢だそうです」

「じゃあ、だれかと一緒なんですね？」

「……」

冴子は、言葉に詰まった。とっさに否定の言葉が出なかったのだ。

「そうなんですよ？」

と、奥村が同じ質問を繰り返した。

「かもしれない」

「柳瀬さん、本当のことを言って下さい。何を言われても、ぼくは驚かないし、ショックも受けないつもりです。ただ、隠しごとをされるのだけは……」

「隠しごとというわけではないわ。それなら言います。奥村さんの想像通りです」

「つまり、だれかが一緒に、それは男だということですね？」

「ええ、たぶん……」

と、冴子は言った。

「そうですか……。それで、その男は、どんな人なんですか？」

「そこまでは、あたしも知らないわ」

「嘘だ」

と、奥村は叫んだ。「柳瀬さんは知っていると思うな。そうだ、これからどこかで会ってくれないか？ お宅の近くの喫茶店とか……」

「ご免なさい」

と、冴子は言った。「電話が来ることになっていたので、ここを空けるわけにはいかないんです」

「じゃあ、ぼくが柳瀬さんのところに行きます。それなら構わないでしょう？」

「そんな……。あたし、アパートに一人で住んでいるのよ。奥村さんの言っていること、非常

識だと思っわ」

冴子は、意識的に強く出た。どこかで食い止めなければ、奥村のペースにはまってしまう。

「わかりました」

さすがに、奥村も気がついたようだ。「たしかに非常識だと思います。では、あしたの昼間にも、どこかで会って下さい」

「昼間ですか？ でも、あたしお勤めがあるし……」

「じゃあ、会社が終わってからでも結構ですから……」

奥村は、なおも粘った。

「ご免なさい。お約束はできないわ」

冴子はそう言って電話を切った。

3

翌朝、冴子が目を覚ましたのは、九時十五分であつた。会社の始まるのが九時半だから、もう完全に遅刻である。

なぜ、目覚ましがならなかったのか。いつも、八時になるとベルが鳴り、飛び起きるのだが……。

ゆうべは、目覚ましをOFFにしたままで、眠つたのだろうか。そう考えて冴子は首を振っ

た。朝方、目覚ましのベルを聞いた記憶があった。そして、もうあと十五分ぐらいはいいだろうと考え、ベルを止めた覚えもかすかにあった。だから、ベルを止めたあと、そのまま本格的に眠ってしまったのだろう。

それでも、まだ頭が重い。寝足りないような気分であった。いつそのこと、休んでしまおうかと考えながら、彼女はベッドでぐずぐずしていた。

いつものように、目覚ましのベルで起きられなかったのには、理由があった。前夜、ベッドに入ったのは十二時過ぎだったのだが、そのあと妙に目がさえてしまい、なかなか眠りに就けなかったのだ。結局、どうにか眠れたのは三時過ぎだった。

なぜ眠れないのか。その原因もわかっていた。『転職』という言葉が、頭の中でぐるぐる回っていたのだ。

——前日、鰻屋で食事を終えてから、冴子は小野沢と一緒に帰った。

その途中、電車のなかで、小野沢から、思いがけない質問を受けた。転職する気はないか、というのである。

『転職ですか？』

と、冴子は辺りに目をやりながら答えた。

『ええ、実は、うちの事務所の女子事務員が、近くやめるんです。だから、いい人がいないかと思ひ、探していたんだけど、柳瀬さんなら考え方もしっかりしているし、適任だと思って……』

『だめですよ。あたしなんか……』

と、冴子は小声で答えた。『法律のことなんか何も知らないし、特別な資格を持っているわけでもありませんから……』

『いや、法律の知識なんなくてもいいんです。柳瀬さんワープロは？』

『いちおう打てます』

『それで十分です。でお給料は？』

立て続けに小野沢が聞いた。しかし、その質問に冴子が答えると、小野沢は

『ははあ……。問題はそこだな』

と、眉をしかめた。『うちの事務所が、そこまで出してくれるかどうか……。あしたでも、聞いてみます。とにかく考えてみて下さい』

これまで、冴子は転職など考えたことがなかった。

もともと、一生勤めるつもりで入社した会社ではない。だから、いずれは退職する予定だったが、それは結婚相手が見つかったときだ、と漠然と考えていた。

しかし、実際のところ、企画課内の冴子は雑用係にすぎない。去年一年は、新米だからしかたがないと、なかば諦めていたのだが、ことしになっても、企画課には新入社員が配属にならず、彼女の仕事に変化はなかった。

気楽といえど気楽だが、面白いことは少しもない。

それでいながら、転職しようなどとは考えなかった。転職という言葉自体が、冴子の頭に浮か